



ドイツ語圏の民話と近世(16・17世紀)ドイツ文学の研究

人文科学系・言語文化学領域

吉田 孝夫

教授

YOSHIDA Takao

博士(文学)(京都大学)

■研究キーワード ドイツ文学 / グリム兄弟 / プロイスラー / 民衆文化論

■主な所属学会 日本独文学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.1d9d05df59f93599520e17560c007669.html>



研究者総覧

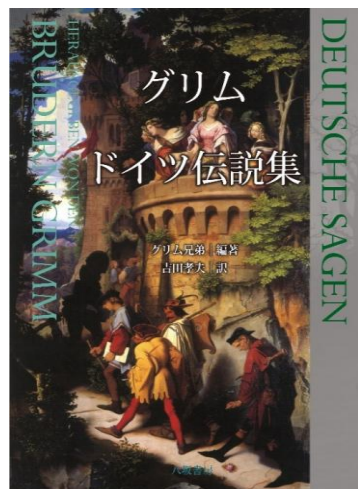
研究概要

★[ドイツ語圏の民話]

ドイツ語圏の民話・昔話を読み、そこに描かれた庶民層の人生観・世界観と、それを具体的に表現している言語的・物語的特徴をまとめる作業をしています。ドイツにはグリム兄弟という民話学の創始者がいますが、いわゆる「グリム童話」だけでなく、『ドイツ伝説集』というもう一つの大切な仕事があって、この二つの民話集と、さらに『ドイツ神話学』という巨大な註釈書をセットにすることで、グリム兄弟が開拓した民話学の可能性を探究しています。

★[格林メルスハウゼンの『阿呆物語』]

グリム兄弟の民話学には、中世と近世の古い書物から採られた興味深い物語が数多く活用されています。なかでも17世紀の格林メルスハウゼンが書き残した作品は非常に重要な言語資料でした。代表作『阿呆物語』に示される、〈阿呆〉として生きることの善き可能性と、それを表現する道化的・舞踏的な言語のパフォーマンスを探究しています。



アピールポイント

★[風土と物語]

グリム兄弟の『ドイツ伝説集』が示すように、人間が暮らす風土は、そこに生まれる物語と深い関係を持っています。大河のほとり、アルプスの岩山、市壁に囲まれた職人たちの町、それぞれの環境で暮らす人びとが、そこに根ざす物語を育んできました。人間がそこに生み落とされた、あるいはそこに暮らす運命となった風土ないし故郷というものは、ただ物質的な環境としてあるだけでなく、言葉と物語として存在し、その人間を支えているのだと思います。左下の書影は、理解の補助線として詳細な註釈と解説文を付した『ドイツ伝説集』の全訳の仕事です。

★[プロイスラー]

ドイツの児童文学のなかで、例えば『ホッツェンプロッツ』などで有名なオトフリート・プロイスラーが、生まれ故郷の風土に根ざした、数点の大切な物語集を残しています。わたしはそんな彼の仕事をいくつか翻訳紹介してきました。

★[民衆と物語]

民話・物語は大地の地層のようなもので、それをゆっくりと読みすすめていく作業は、言葉の集積から成る大小さまざまな山を掘りかえし、分類し、化石や宝石を探りあててゆく、スリリングな発掘のプロセスです。しかし庶民層の物語は、きちんと記録されていないことが多く、また壊れやすいものなので、発掘の作業には細心の注意深さと丁寧さが求められます。言葉とそれが意味するものを、ゆっくりと確定していくこと、言葉の意味の揺らぎを耐えしのび、それを体感することを、研究の場でも、大学の授業の場でも実践することを目指しています。ドイツの山岳伝説に見える世界観と人びとの生きざまを叙述した『山と妖怪』(八坂書房、2014年)は、わたしが精魂をこめて取り組んだ仕事の一つです。